

7 佐倉市立美術館

美術展の枠を取り払う市民参画の 企画づくり

1. 美術館の概要

- 開館年： 1994年
運営母体： 佐倉市
都市人口： 17万人
- 延床面積： 5,137㎡
展示室面積： 835㎡
開館時間： 10:00～18:00
休館日： 月曜、年末年始
- 運営スタッフ総数： 10名
(非常勤含)
学芸員数： 6名
教育普及担当者数： 1名
(学芸員数、教育普及担当者数は内数)
- 所在地・連絡先：
〒285-0023 佐倉市新町210
tel. 043-485-7851
fax. 043-485-9892

2. 美術館の特色、事業概要

- 江戸時代に佐倉藩の城下町として栄えた佐倉市の文化・歴史ゾーンに位置し、1918年に建てられた煉瓦造りの歴史的建造物(旧川崎銀行佐倉支店)の保存と活用を考慮して建設された。国内外の優れた美術作品に接するための展覧会企画のほか、市民の発表の場としても利用されている。
- 主な収蔵作家：浅井忠、都鳥英喜、荒谷直之介、香取秀真、津田信夫、堀柳女等佐倉市と房総ゆかりの作家の作品を中心に収集。
- 収蔵作品の展示(ただし常設展はなし)のほか、市民ギャラリーとして市民の書道展、美術団体の展覧会等も行う。
 - 特別展(1999年度)：
ボイマンス美術館展 - 20世紀美術の挑戦 -

佐倉・房総ゆかりの作家たち

- 新収蔵作品展 -

チバ・アート・ナウ'99(市内および県内で制作する新世代の作家を紹介し、今日の千葉における美術状況を明らかにする)

ボイマンス美術館展

- モネ、ゴッホからピカソまで -

佐倉・房総ゆかりの作家たち：

- 生誕100年香取正彦展 -

- 年間事業費： 8,519万円
(人件費、施設管理費を除いた年間予算)
教育普及予算： 748万円
(上記年間事業費の内数)
- 総入館者数：64,497人(1999年度)

3. 教育普及活動導入の背景、経緯

- 計画時は市民ギャラリーとして構想されたこともあって、収蔵作品による常設展は行われていない。したがって、通常の普及活動の手段であるギャラリートークやワークシートといった作品を普及するための手段は成立しにくい。
- 作品にまつわる知識を噛み砕くことだけが教育普及ではなく、自分で考え、楽しむ態度の普及を行うべきという学芸員の問題意識から、開館以来、通常の教育普及活動ではなく、年1回の企画展「体感する美術」シリーズを普及活動として実施、98年度からは市民とつくりあげる形をとっている。

4. 教育普及活動の内容と運営

◎ 体感する美術シリーズ

- 「美術や美術館とまちや人とのつながりを考える」ことをテーマに、夏休み期間に実施するワークショップ・プログラム。子どもを含む市民全員を参加対象として、見るだけでなく、五感を使った

体験を重視している。

- 1995年の第1回から、以下の6本のプログラムを実施。
 - '95 「アートと遊ぼう、夏休み!」:夏休みに子どもも楽しめる企画として、展覧会と3つのワークショップを実施。
 - '96 「アーティストと考えるサバイバル・ツール」:「アートはサバイバル・ツールになり得るか」という問いかけへの答えを、携帯可能な作品にして、宅急便で送ってほしいと呼

びかけた展覧会。57点の作品が集まった。

- '97 「まちへ出よう - 風と精霊と人の声」:展示やワークショップをまちへ繰り出し、作家のものであった制作プロセスを参加者の市民に広げていくワークショップ・プログラム。
- '98 「まちとアートのコミュニケーション」:あえて美術アーティストは呼ばず、まちづくり関係者、演劇人、美大生などとワークショップを楽しんでもらうプログラム。
- '99 「ミエナイ・サクラヲ・ミル」:*表参照

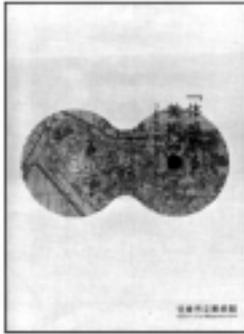
◎ 主な教育普及事業の概要

事業の名称(開始年度)	事業の内容(実績は1999年度)、課題や今後の展望										
体感する美術'99 ミエナイ・サクラヲ・ミル (1996年度)	<ul style="list-style-type: none"> • 夏休みに子どもを含む参加者を対象として、観るだけではなく、五感を使った体験を重視したプログラム。 • 99年度は、普段暮らしているまちの中で、目に見えているけれど気づいていないもの、目に見えないけれど存在しているものを、アートプロジェクトを通して探っていこうとするもので、以下の5つのワークショップを実施した。 <ul style="list-style-type: none"> • ワークショップ A 『Constellation Project in Sakura まちの星座をさがそう - 佐倉プラネタリウム』(中学生～一般、16名) • ワークショップ B 『「手作り見張り塔で佐倉をずいっ〜と」屋外編』(小学3年生～6年生:16名、中学生～一般:4名) • ワークショップ C 『[pop@sakura.] - 捨て看プロジェクト』(小学4年生～一般、20名) • ワークショップ D 『GoGo さくらランド』(IFS)(小学生、30名) • ワークショップ E 『まちの気分、空気の色』(IFS)(その場を通る人誰でも) • 企画にあたっては、98年度から募集した市民ボランティア IFS と美術館の担当者がディスカッションを繰り返しながら進める手法を取っている。 • 2000年度は、IFS のメンバーが他の人々(学校の先生をターゲット)に働きかけて企画を作ろうと試みたが、物理的な時間の問題や共通理解を作る部分で難しかった。 • ボランティアで参加するスタッフが、「企画をつくる」という体験をしていることが、ワークショップ当日で重要になってくる。 • 毎回新しい「つくる」体験を生み出していくために、経験を活かしつつ、新しいチャレンジをすることが必要。 										
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>対象</th> <th>参加者数</th> <th>実施頻度</th> <th>参加料</th> <th>予算規模</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>一般市民</td> <td>延べ290名</td> <td>年1回</td> <td>実費</td> <td>536万円</td> </tr> </tbody> </table>	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模	一般市民	延べ290名	年1回	実費	536万円
対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模							
一般市民	延べ290名	年1回	実費	536万円							

体感する美術シリーズ
 左:「97 まちへ出ようー風と精霊と人の声」
 右:「98 まちとアートのコミュニケーション」



- '00 佐倉観光案内:「観光」とは目に見えない光をみること、そしてその土地の文化や風土をみること、という考えに基づいて「観光」案内を考えるワークショップ・プログラム。
 - 開館して初めて迎えた夏休みシーズンに、普段はあまり美術館に来ない子どもの参加できるプログラムを実施しようと企画したのが、「体感する美術'95 - アートと遊ぼう、夏休み！」。
 - アーティストの作品展示、公開制作という2つのワークショップを実施。初回ということもあり、実際は企画会社に委託して実施。
 - 公開制作では、手伝ってくれるボランティア5人を一般から公募。ワークショップの中には、子どもたちが美術館の中で工事の仮囲いの鉄板に一人一枚絵を描き、それを佐倉市立根郷小学校の改築工事現場の囲いとして使用したというものもある。これはアーティストのアイデアで実施したもので、アウトリーチという意識はなかったが、結果的に美術館の外に出ることができた。
 - 95年と96年はアーティストの作品展示を行ったため、展示室への入場は有料としたが、97年以降はワークショップの結果展示ということで、入場は無料としている。
 - 結果のクオリティを求めると、ある程度フォーマットとが必要となり、プロセスの段階でのびのびした自由な発想が制限されてしまうなど、結果のクオリティと自由な発想は反比例の関係にある。どちらを優先するかはその時々での判断であり、どちらが正しいということではない。
- ◎ IFS との連携について
- IFS とは「Inter-art Forum Sakura」の略で、「体感する美術」シリーズの企画、運営に参加するボランティア市民の集まり。
 - 現在、企画会議等の案内を送付しているメンバーは約50名。興味のある人の参加も受け入れており、会員制度のような枠組みはない。
 - IFS の組織づくりのきっかけは、97年の「体感する美術'97 - まちへ出よう - 風と精霊と人の声」の際に、アーティストのアイデアで準備段階から市民スタッフを募り、当日のワークショッププログラムをつくっていった時。事業の実施に向かうプロセスの部分が本当のワークショップだと実感し、次年度から市民を企画段階から巻き込んでいくこととした。
 - 97年度事業の終了後、次年度に向けて、「現代美術を楽しみたい方、それを伝えることに興味のある方」というフレーズで、市の広報紙に「体感する美術クラブ(仮)」のメンバーを募集した。それが現在の IFS の前身である。
 - 98年「体感する美術 - まちとアートのコミュニケーション」で、「体感する美術クラブ(仮)」のボランティアメンバーに、企画から会期中の運営までお手伝いの形で参加してもらった。
 - 98年度のプログラムへの参加で、美術館の意図に理解が得られた段階で、99年に向けて、企画段階からの参加を促し、本格的な市民参画のワークショップ・プログラムが立ち上がった。その際、「体感する美術クラブ(仮)」から「Inter-art Forum Sakura - IFS」に名称を変更。
 - 99年度「ミエナイ・サクラヲ・ミル」、2000年度「佐倉観光案内」は、企画会議で IFS のメンバーからアイデアを募り、美術館とともに企画として練り上げ、どんなアーティストと結びつけられるかを考えるという流れ。会議が終わったあとに「IFS レター」を出して、決定事項を確認しながら、方向づけを行った。
 - 今のところ、美術館を離れた IFS 独自の活動はないが、今後は、NPO 化の方向もあるかもしれない。
 - しかし、現在 IFS 自体は過渡期で、美術館としても IFS という特権階級にのみ開かれているとい



体感する美術シリーズ
「99 ミエナイ・サクララ・ミル」

う点で、望ましい姿ではない。今後、隣接する国立歴史民俗博物館や、商店街、学校等とつながりのある企画を考え、より多くの人に美術館を開いていくことが必要となっている。

◎ アートの考え方とアーティストとの連携

- 従来アートとは、作家(アーティスト)主体だったが、普及事業では、「鑑賞者の中に存在する媒介者(= ボランティア)がアートをリードする」という考え方で事業を行っている。
- 「体感する美術」の一連のプロジェクトは、美術館にある何かをアウトリーチしていくのではなく、IFS と考えるプロセス、当日の参加者で行うワークショップ、という2重構造のアウトリーチプログラムであり、そこで参加者ひとりひとりのうちに生まれた意識(= 結果)もアートのひとつの形だという考え方。しかし、それをアートと呼ぶかどうかは議論が分かれるところだろう。
- アーティストのスタンスもさまざまだが、現代美術、特にコンセプチュアルアートでは、考え方自体がアートであり、表現はどこで何をしてもいいという状況になっている。ワークショップやパフォーマンスを自分の芸術表現だと思っているアーティストと組めれば、意味のある仕事ができる。

5. 教育普及活動の効果、今後の課題と展望

◎ 教育普及活動の実施に伴う効果

- 一番大きな成果は、IFSの組織化。子ども会とのつながりなども含め、活動の間口が広がっている。教育普及活動を行えば、佐倉市民全員が美術好きになるというわけではないので、特定のメンバーに限られているとはいえ、IFSというグループができたことは大きな成果。
- 市や美術館も、IFS という市民組織が、美術館で生き活きと活動することを前向きに評価している。

- ワークショップ形式では参加者が限られてしまうと言われるが、99年の「ミエナイ・サクララ・ミル」では、まちを歩く人それぞれが感じた色のボールを選ぶというワークショップを開催したところ、期間中の参加者は一日800人にもものぼった。内容や方法次第で参加者数は大きく左右される。

◎ 今後の課題と展望

- この「体感する美術シリーズ」は、最初から現在のような方向性だった訳ではない。毎年プロジェクトを行っていく過程で定まってきた方向性。
- 従来の美術館は、「保存」と「公開」とのバランスの中で運営されてきた。しかし現代美術では、物理的に保存できる作品とは別の形態になっているし、活動の場所を美術館に留めないというアーティストも増えている。その時に美術館が何をすべきか、どうあるべきかを考えると、そうした活動を市民に「つなげてゆく場」という考え方にたどり着いた。
- アーティストの活動のスタイルと美術館のあり方は密接に関わっており、美術館の活動が美術の形態というものの変化を推進している面もあるだろう。
- 佐倉市立美術館の「体感する美術」の取り組みは、もしかしたら従来型の美術館自体を解体しようという試みかもしれない。